

この文章は、茨城高校生徒会誌『轟（とどろき）』14号（令和5年3月1日発行）に寄稿したものです。中学生にも読んでもらいたいと思い、「校長室だより」でも配信します。長い文章ですが、じっくり読んでみてください。

我が上なる星空と、我が内なるレイシズム

自分が、レイシズム、人種主義をテーマに文章を書こうと思ったきっかけは、2021年11月に本校が実施した進路行事「職業教育講演会」でした。この日、来校された講師の一人に、ピーター・フランクルさんがいました。ピーターさんは、ハンガリーのご出身で、数学者、大道芸人、テレビタレントなどいくつもの顔を持ち、12カ国語を使いこなすという、マルチな才能にあふれた方です。その日は「真の国際人を目指すために」をテーマに、生徒たちに講演をしていただきました。

講演会が終了し、講師の先生方がお帰りになる中、呼んだタクシーがやって来ず待ちぼうけを喰ったピーターさんと、正面玄関前でしばらくお話をさせていただく時間がありました。秋も終わり近く、学校に隣接する祇園寺の銀杏も半分以上葉を落としていましたが、日差しは暖かく小春日と呼びたくなるような日でした。

気取らず親しみやすい人柄のピーターさんから、茨城の海や河で趣味の釣りをした話、数学の研究者として東京大学に招待され来日したときの話など楽しく聞かせていただいているうち、そこにいた話の筋はよく覚えていないのですが、ピーターさんが「ぼくはユダヤ系です」という発言をされました。東欧出身でユダヤ系とお聞きして、自分は「それでは、ご両親は第2次大戦の時代などはご苦労されたのではないですか？」と尋ねました。するとピーターさんは、本当にさりげなく、「私の祖父母はアウシュビッツ（注）で亡くなりました」とおっしゃったのです。

自分はみぞおちにズドンッとボディーブローをくらったようなショックを感じました。アウシュビッツをはじめとするユダヤ人強制収容所でナチスが行った残虐な行いについて、知識としては知っていましたが、その当事者を肉親に持つ方を目の前にするのは初めてでした。聞きかじりの知識にもとづいて、「ご苦労されたのではないですか？」などと軽々しく質問してしまったことを激しく後悔しました。

ピーターさんは特に気にされたふうもなく、ハンガリーやヨーロッパでユダヤ系の人たちの置かれてきた立場について説明してくださいました。そのときの会話の流れで、自分は確か「日本人はレイシズムに鈍感だといわれるが、単一民族であることが、レイシズムを見えにくくさせているのだと思う」というような発言をしたと記憶しています。するとピーターさんは、一瞬、こちらをのぞき込むような表情をすると「でも、単一民族の日本人の中にも“差別”は存在していますよね？」とおっしゃり、優しい目でニコッと微笑まれました。ちょうどタクシーが到着し、ピーターさんは車中の人となりました。

それから何冊か、ピーターさんの本を読ませていただきました。ピーターさんの4人の祖父母全員が強制収容所で亡くなったこと、ピーターさんのご両親も収容所に入り、お父様はそのときの経験から無神論者になったことを知りました。フランクルという姓がユダ

ヤ系の方に多いと知り、『夜と霧』の著者ヴィクトール・フランクルと同じであることに気づきました。

レイシズムについては、これまでも何度か「校長室だより」で扱おうとチャレンジしたのですが、そのたび行き詰まってしまっていました。レイシズムという問題の複雑さ、難しさを実感させられる経験でした。今回、生徒会誌『轟』の原稿依頼を受けたのをきっかけに、なんとか再挑戦してみたいと思います。

ルース・ベネディクトの『レイシズム』

レイシズム、人種主義という言葉は、1930年代、ドイツ・ナチ党の拡大にともないヨーロッパで広まったとされています。（『人種主義の歴史』平野千果子著（岩波新書））ナチスのレイシズムは、反ユダヤ主義とほぼ同義でした。日本人にはなかなか理解しにくい反ユダヤ主義ですが、これはナチスの時代に突然登場したわけではありません。ヨーロッパの歴史の中で長く根深く存在し続けてきました。ちなみに「ユダヤ人」という明確な人種的特徴を持った人々が存在するわけではありません。一般にユダヤ人とは、ユダヤ教を信仰する人々、またはその子孫を指します。

ピーター・フランクルさんはその著書の中で、カトリックが主流のヨーロッパにあって、異教徒のユダヤ人が異端視されてきた歴史について述べています。ほんの半世紀ほど前まで、日曜日に行われるカトリックのミサでは神父たちが「われわれのイエスキリストを殺したのはユダヤ人であった」と語るのが常だった、といます。毎週、毎週「ユダヤ人は悪いやつらだ」と聞かされつづけた人々は、当然の結果としてユダヤ人をひどく憎むようになります。「反ユダヤ主義は迷信によく似ている。たとえば十三日の金曜日に悪いことが起こりやすいと信じている人は、たとえ十三日の金曜日に宝くじが当たって百万円を手に入れたとしても、彼の基本的な考えを改めようとはしない」とピーターさんは書いています。（『世界青春放浪記』ピーター・フランクル（集英社文庫））

20世紀のレイシズムを論じた著作に、ルース・ベネディクトの『レイシズム』があります。『レイシズム』が発表されたのは1940年、第2次大戦のさなかでした。アメリカの文化人類学者であったベネディクトは、この本のまえがきで「現代では、人種をめぐる個々の課題への発言と、レイシズムの粗雑な言説が区別されないで一緒くたにされている。そのような現状を変えるために私はこの本を書いた」と述べています。彼女が“レイシズムの粗雑な言説”と名指した先にはナチズムがあります。

ヨーロッパの第2次大戦は、“純粋人種”による国家の建設を目指すナチス・ドイツによって引き起こされました。1939年のポーランド侵攻を発端に、ドイツは強力な軍事力で次々と周辺諸国に侵攻、これらを支配下におきました。ナチズムは、極端な人種主義、国粹主義をその思想の基盤としています。ナチズムの信奉者たちは、髪の色、目の色、身長、頭指数（注）などを根拠に、自らを優越的な純粋人種、アーリア人種であると主張します。一方で、同じ白人でもスラブ人やラテン人などを自分たちよりも劣った民族であると考えます。

そうした人種による優劣の位置づけの中で、最も下位におかれたのがユダヤ人でした。

1935年のニュルンベルク法で市民権を失ったユダヤ人たちは、第2次大戦が勃発すると非ユダヤ人との交際を禁じられ、ゲットーと呼ばれるユダヤ人居住地区に集められます。さらにドイツ軍の戦線がバルカン半島やソヴィエト連邦へと拡大する中で、ナチスは恐るべき「ユダヤ人問題の最終的解決計画」を実行にうつします。ドイツの占領地全体に散らばるユダヤ人たちはヨーロッパ東部の強制収容所へと移送され、収容所での苛酷な労役と乏しい食事により次々と命を落としていきました。そして、生き残った人々も悪名高い“ガス室”に送られ殺害されたのです。ホロコーストと呼ばれるユダヤ人絶滅政策により、戦争中にナチスに処刑されたユダヤ人の総数はおよそ570万人と推計されるといいます。

ベネディクトは『レイシズム』の中で、人種の違いによる優劣の差を徹底的に否定しています。エスニックグループによる身体的特徴や文化の差異の存在を認めつつ、しかし、ブロンドの髪を持つ人種が黒色の髪色の人種より芸術的才能に恵まれていたり、前後に長い頭蓋骨を持つ人種が扁平な頭蓋骨の人種よりも優れた知能を有しているなどという主張は、根も葉もない幻想にすぎないことを科学的根拠に基づいて明らかにしていきます。そもそもベネディクトは“純粋人種”という概念自体を認めていません。「人種と文明は混交する」とする彼女は、「どんなデータを集めてみても、これまでに大規模な人種の混交が繰り返されてきたことが明らかになるだけ」だと述べています。

さらにベネディクトは、レイシズムが「政治家の飛び道具」として利用されてきた点も指摘しています。ナチスは、古くから存在していた反ユダヤ主義を利用し、ユダヤ人を国民の不平や不満の標的とすることで狂信的なファシズムを生み出しました。レイシズムの理論が政治的な利害関係から形作られ、あおり立てられることは頻繁に起こっており、それによって、あるときは国同士が兄弟のように結びつき、あるときは仇敵のように憎み合う、とベネディクトは述べています。こうした状況が存在するのは、何も20世紀のヨーロッパに限ったことではありません。歴史上のさまざまな国々で、また、21世紀の世界を見渡す中でも、レイシズムが政治と結びつき利用されているケースを見いだすのは難しいことではありません。

ベネディクトは、私たちが、正しく歴史を学び、遺伝や慣習の受け継がれていく様式を知り、好戦的な愛国主義と一線を引くことができれば、レイシズムは雑音として消えていく、と述べてます。一方で、彼女はこうも言っています。「しかし私たちが傲慢無知であったり、あるいは恐怖にあおられて平常心を失うとき、分かりやすく耳に心地よい物語がそっと忍び入る。自暴自棄になったとき、私たちは誰かを攻撃することによって自分を慰める」

阿部大樹氏による新訳で刊行された『レイシズム』（講談社学術文庫）を読んで、まず驚かされるのは、80年以上前に書かれたこの本の持つ新しさです。1940年、ヨーロッパのレイシズムが同時代のできごととして進行しつつある中、ベネディクトが、その全体像を俯瞰し、問題の本質に迫っていたことを、私たちは後の時代から眺めることで理解することができます。逆にいえば、この本の新しさは、『レイシズム』が提起した問題に対して、21世紀を生きる私たちがまだ答えを出せずにいる点にある、といえるかもしれ

ません。

『レイシズム』が執筆された当時、ナチスによるユダヤ人迫害はニュースとして、もちろんアメリカにも伝えられていました。しかし、レイシズムがホロコーストという人類の狂気を生み出していくことまでは、さすがのベネディクトにも予測できていなかったことでしょう。戦後、ナチスによるユダヤ人大量殺戮の事実が明らかになったとき、ベネディクトは何を思ったのでしょうか。

人種による優劣の有無を論じた著作のひとつに、ジャレド・ダイヤモンド著『銃・病原菌・鉄』があります。1998年にピューリッツァ賞を獲得したこの本は、ある人種の築いた文明が近代化し、他の文明を征服したのに対して、ある人種の文明は近代化以前にとどまり、他の文明に征服されたというその違いが生じたのは、人種間の優劣の差ではなく、地理的条件、自然条件、他の人種との交流など、環境の違いに起因することを膨大な資料をもとに説明しています。

世界的ベストセラーとなった『銃・病原菌・鉄』が書かれたのは、『レイシズム』の約60年後のことです。人種による優劣の差異を否定する意見が提起される背景には、人種による優劣を肯定する言説の存在があります。私たちは、時代をこえて社会を分断し続けるレイシズムの深い裂け目の存在を認めないわけにはいきません。

ジョージ・フロイドの死とBLM運動

2020年5月25日、アメリカ、ミネソタ州ミネアポリスで一人のアフリカ系アメリカ人男性が、警察官による拘束を受け死亡する事件が発生しました。男性の名はジョージ・フロイド。ヒューストンを拠点とするヒップホップグループのメンバーでした。

事件は、偽札を使用しようとした男がいる、との通報を受け現場にかけつけた白人警察官が、飲酒または薬物の摂取で興奮状態にあったフロイドに手錠をかけ、8分以上その頸部を膝で強く押さえつけて死亡させた、というものです。警官はフロイドが反応を示さなくなった後も、約3分間、頸部を膝で圧迫し続けたといます。フロイドを拘束した白人警官は、過去3回にわたって人種的マイノリティに対する銃撃に関与していました。

事件の顛末は、フロイドの友人や、一般市民が撮影した動画に記録されていました。「Please」「I can't breath（息ができない）」などと拘束を解くよう懇願するフロイドが、やがてぐったりと動かなくなる様子を撮影した動画がSNSで拡散し、メディアもこれを取り上げました。ミネアポリスでは26日にデモが起こり、事件の現場近くで数百人の市民が「I can't breath」と書かれた紙を掲げ、警察の暴力に抗議しました。翌日にはデモの参加者の一部が暴徒化し、略奪や放火が発生しました。

事件に対する抗議活動は、その後全米に拡大します。首都ワシントンで発生した暴動が激化した際には、当時のトランプ大統領が一時地下壕に避難する事態に至ったといます。さらに抗議の声はイギリス、オランダ、ドイツ、イタリアなどヨーロッパに広がり、日本でも東京や大阪で抗議デモが行われました。

これらの一連の抗議活動は、Black Lives Matterの頭文字からBLM運動と呼ばれています。「Black Lives Matter」は直訳すれば、「黒人の命は大切だ」という意味です。この言

葉は、2012年、フロリダ州サンフォードで17歳の黒人男性が警官に射殺された事件をきっかけに生まれました。その後も警官による黒人殺害事件が起こるたび、「# Black Lives Matter」のハッシュタグが付されたメッセージが発信されてきました。その抗議活動がもっとも大きな世界的なうねりを見せたのがジョージ・フロイド殺害事件でした。

アメリカの黒人差別問題の起源は、18世紀のアメリカ独立までさかのぼります。民主主義の旗手たるアメリカ合衆国の建国は、先住民であるネイティブアメリカンへの弾圧と黒人奴隷制度という矛盾のうえに実現しました。南北戦争を経て、奴隷制度が廃止となった後も黒人に対する差別は依然として存在し続けました。

1950年代から60年代にかけて、公民権運動がアメリカ社会を激しく揺り動かします。公民権運動とは、当時のアメリカで行われていた人種隔離政策、人種差別に反対し、法の下での平等と市民としての権利と自由を求めた社会運動です。運動の中心となったのは黒人コミュニティでした。

公民権運動の高まりのきっかけとなった事件のひとつに、アラバマ州モントゴメリーでのバス・ボイコットがあります。デパートの裁縫工だった42歳の黒人女性ローザ・パークスは仕事帰りのバスの中で、白人専用だった前部座席の、すぐ後ろの席に座っていました。その後バスには白人たちが乗り込み、バスの運転手はパークスに白人乗客のため席を譲るよう要求しました。これに対してパークスは、静かに、しかしはっきりと「ノー」と答えたのです。パークスはそのために逮捕されてしまいます。

この事件に憤った黒人たちは、バスの利用をボイコットする運動を起こします。そのリーダーとなったのが、後に「私には夢がある」という有名なスピーチを行ったマーティン・ルーサー・キング牧師でした。この運動の結果、連邦最高裁判所は「バスの人種隔離は違憲である」という判決を下します。

この成果について、まだ20代の若きキング牧師は「それは黒人だけの勝利ではない。正義と良心の勝利である」と語っています。バス乗車拒否運動は、白人にとっては人種の問題でしたが、黒人たちにとっては人間の尊厳の問題でした。すべての人間が享受すべき、自由、平等、正義のため、黒人たちは戦ったのです。

1964年、新公民権法案は、法案を提出したケネディ大統領のダラスでの暗殺事件を経て、大統領を引き継いだリンدون・B・ジョンソンの政権下で正式に法律として成立します。そこには、選挙の際の読み書き能力テストの禁止、ホテルやレストラン、映画館などの公共施設での人種による差別、隔離の禁止、公教育における人種差別の排除などが明記されていました。

アメリカ史を専門とする明治学院大学の野口久美子氏は、BLM運動と公民権運動を比較し、3つの違いをあげています。1つめは、BLM運動が個別の事件や事象に対する抗議運動にとどまらず、ステレオタイプ化された黒人のイメージが生み出す制度的、構造的差別に対する抗議も含まれている点、2つめは、BLM運動の参加者には、黒人だけではなく、非黒人の、特に20代から30代の若年層が多く、彼らはSNSで結びつき抗議活動を展開している点、そして3つめは、BLM運動には、公民権運動におけるキング牧師やマルコムXのような強いリーダーシップを持つ指導者が不在であるという点です。

ジョージ・フロイドの死をきっかけとしたレイシズムへの抗議の声は、メディアやSNSを通じ、ミレニアル世代、Z世代の若者たちに広がりを見せました。その声は、当事国のアメリカだけにとどまらず、世界中の若者たちに訴え、何かを変えなければならないと思わせる響きを有していました。強力なリーダーを持たない、いわば草の根的な抗議活動が拡大していった背景には、私たちの生きる時代の空気が持つ、レイシズムへの普遍的な拒否感、嫌悪感があります。BLM運動をあらためて振り返るとき、そこにレイシズムに対峙する際の新たなヒントが見えてくるように思えます。

現代日本のレイシズム

ここまで過去の、あるいは外国のレイシズムについて話を進めてきましたが、ここで現代の日本に目をむけてみましょう。

本文の冒頭、ピーターさんとの会話の中で、自分が「日本人は、単一民族」と発言したくだりを紹介しましたが、実はこの発言は間違っています。例えば沖縄は、明治政府の「琉球処分」により併合されるまでは琉球王国であり、そこに住む人たちは琉球人と呼ばれていました。和人が入植する以前、北海道の広範囲には異なる言語や文化を持つアイヌ民族の人々が住んでいました。現在も北海道を中心に、アイヌをルーツに持ち、そのアイデンティティを受け継ぐ人たちが暮らしています。また、かつて日本が植民地としていた朝鮮半島や台湾、中国東北部などから移り住み、日本の社会に溶け込んで生活している、在日コリアン、在日台湾人、在日中国人の人たちも大勢います。アジアや南米などを中心に、日本にやって来て働く外国人の数も年々増加しています。

こうしたさまざまな出自を持つ人たちの多くが、同じ言語を用い、同じ文化の中で暮らしていることから、私たちはなんとなく均質な人たちによって社会が形成されていると思いがちです。しかし実際には日本は、さまざまな歴史、さまざまなルーツを持つ人たちによって構成される多文化社会である、という認識を持つべきでしょう。

2010年代前半、ヘイトスピーチをとまなう排外主義デモが頻発し、社会問題化しました。ヘイトスピーチは「憎悪表現」「憎悪宣伝」などと訳されます。東京都新大久保、神奈川県川崎市、大阪府鶴橋など、在日コリアンの人たちが多く暮らす地域に街宣車で押しかけ、「死ね」「日本からたたき出せ」「ゴミ、虫けら」などの罵詈雑言を浴びせるヘイトスピーチの様子は、たびたびメディアにも取り上げられました。ヘイトスピーチに反対する人たちによる「カウンター」と呼ばれるデモも行われました。

ヘイトスピーチの実態に迫り、現代日本のレイシズムの問題点を鋭く提起した本に『ヘイト・スピーチとは何か』師岡康子著（岩波新書）があります。2013年に発行されたこの本では、蔓延するヘイトスピーチの実情をふまえながら、ヘイトスピーチのもたらす害悪について述べ、さらには海外の先例も紹介しつつ、ヘイトスピーチの法規制の必要性を論じています。

弁護士である師岡氏は本の中で、ヘイトスピーチの標的となった人々が強いられてきた恐怖と屈辱の実例をあげて、ヘイトスピーチが深刻な人権侵害であることを繰り返し訴えています。そして、ヘイトスピーチが「マイノリティの心身を取り返しのつかないほど傷

つけ、人生を破壊するほどの被害をもたらしている」にも関わらず、それを明確に規制する法律がなく、被害者救済が進んでいない問題点を明らかにしています。

ヘイトスピーチを規制する法律づくりが遅れた背景のひとつに、「表現の自由」があります。師岡氏は、一般論として、権力が言論や表現の自由を規制することの危険性にふれたうえで、国際人権法を例にあげ、表現の自由の行使については「他の者の権利または信用の尊重などを理由として制限すること」が可能であると述べています。

『ヘイト・スピーチとは何か』の中に、〇〇（在日コリアンが多く住む地区）で実行されたヘイトスピーチで、中学生の少女が「いつまでも調子に乗っとったら、南京大虐殺じゃなくて、〇〇大虐殺を実行しますよ！」という発言をした、という話がありました。これを読んで、長年、中高生の教育に関わる仕事をしてきた者として、深く考えさせられました。

まず、中学生の彼女は、在日コリアンが日本で生活するようになったいきさつや、南京大虐殺などの日本とアジアの歴史について、どこまで知り、どこまで自分の頭で考えることができていたのだろう、と思いました。もしも彼女が、人種主義に偏った大人たちから他律的な憎悪を植えつけられているとしたら、そしてヘイトスピーチが人間の最も醜い部分をあらわにする行為であることを自覚しないまま行動しているとしたら、彼女もまたレイシズムの被害者とはいえないだろうか、と思います。

現代、インターネットやSNSをはじめとするさまざまな媒体の中には、おびただしい情報が行き来しています。その中には、反社会的な、市民的良識を否定する立場からの主張も数多く存在します。偏った過激な思想に接したとき、大人の多くは、その情報を相対化して受けとめ、真偽を評価することができます。しかし、知識や経験の幅がせまい中高生は、それらの情報を鵜呑みにしてしまう危険性があります。ひとつの意見を絶対的なものと過信しないこと、多様な考え方にふれ、多面的なものの見方をし、しっかりと自分の頭で考えることが、中高生の諸君にとって非常に大切です。

2016年6月、「ヘイトスピーチ解消法」が施行されました。そこには、ヘイトスピーチが「差別的」で「許されない」ことであると明記されています。ヘイトスピーチ解消法は、あくまで理念であり罰則を科すものではありませんが、法律の施行以降、ヘイトデモは激減しました。しかし、それはヘイトスピーチそのものが消滅したということではありません。インターネットやSNS上には、人種的マイノリティを誹謗中傷する、読むに堪えないような幼稚でゆがんだ言葉が並んでいます。ヘイトスピーチは続いています。

ヘイトスピーチは、直接的でわかりやすい、目に見える差別ですが、中には、見えにくい、本人がそれと意識していないレイシズムもあります。

2021年、テレビの情報バラエティー番組で、アイヌ女性取材したドキュメンタリー作品を紹介した際、あるお笑い芸人が「この作品とかけまして動物を見つけた時ととく。その心は、あ、犬」と発言し、激しい非難を受けました。アイヌ民族にとって「あ、いぬ」は昔から差別用語として使われてきたからです。もちろん、このお笑い芸人や番組の関係者に、アイヌ民族を差別しようとする意図があったとは思えません。しかし、アイヌ弾圧

の歴史について少しでも知っていたら、少なくとも、民族の名称を「犬」に例えることの意味を想像することができていたら、アイヌを出自に持つ人たちを傷つけることは避けられたのではないかと思います。

私たちの多くは、レイシズムが間違っただけの考え方であると認識しています。レイシズムが社会や人々を傷つけてきた歴史も知っています。しかし、レイシズムの本当の怖さは、知らず知らずのうちに自分が加害者としてレイシズムに加担している可能性がある、という点にあります。

自分が子どものころ、クレヨンや色鉛筆で用いられていた「肌色」という名称は、現在では使われていません。薄いオレンジ色以外の肌の色を持つ人たちへの差別となる可能性があるためです。私たちが大相撲で日本出身の横綱誕生を喜ぶとき、それが外国出身力士を否定する言動につながっていないか慎重に省みる必要があります。今、自分が“あたりまえ”として行っていることが、差別を助長し、見知らぬ第三者を傷つけているかもしれません。グローバル化がつかないスピードで拡大する現代にあつて、レイシズムの問題、差別の問題から無関係でいられる人は誰ひとりいないのです。

いじめとレイシズム

ナチズムや黒人差別、ヘイトスピーチなど、さまざまな差別が存在することを見てきました。ここまで読んで「たしかに差別はひどいけれど、これらは特別なケースで自分たちの身近な問題ではないな」と思った人はいるでしょうか。日本国内で生活していると人種について意識することは少ないかもしれないし、まして人種にもとづく差別を経験することはまれかもしれません。しかし、私たちの身近にも差別は存在しています。

いじめは、私たちのもっとも身近に存在する差別のひとつです。2013年に定められた「いじめ防止対策推進法」では、いじめについて“学校などで他の生徒から、心や体に苦痛を感じる行為を受けたらそれはいじめです。それがインターネット上の行為であっても同じです”と定義しています。このいじめの定義が意味するのは、いじめはハラスメントの一種であり、行われた行為の内容ではなく、その行為を受けた人の受け止め方が基準になる、ということです。

もしも私たちが、人間としての価値を否定されたり、保障されるべき権利を奪われたりしたら、憤りを感じるはずですが、ましてそれらが、私たちが選択したのではない属性、例えば、人種や性別、体型や容貌、生まれた地域や環境にもとづくものであったら、不条理を感じる思いはもっと強まると思います。いじめの中でも最も陰湿で残酷な集団いじめは、このような中で生まれてきます。

『「いじめ」や「差別」をなくすためにできること』（ちくまプリマー新書）で著者の香山リカ氏は、もしもいじめや差別にあったときは、まず「逃げる」ことが大事だ、といいます。かさを持たずに外に出て、にわか雨で濡れになったとき、「どうして雨が降ったのだろう？」と考えても解決はしません。いじめも同じです。香山氏は「どうして自分がいじめにあったのだろう」「自分にも何か悪いことがあったのではないか」などと考

えることは、自分でいじめの辛さを増幅させてしまうことにつながるといいます。いじめでどんなに心が傷ついたとしても、その人のすべてが失われたり、よいところがなくなったりすることはありません。大切なのは、考えすぎずに心を休めること、そして誰かに相談し、自分だけで解決しようとしないうことだ、と述べています。

精神科医でもある香山氏によって書かれた『「いじめ」や「差別」をなくすためにできること』は、いじめはどのように始まるのか、いじめや差別はなぜいけないのか、いじめを受けたり見かけたりしたらどうしたらいいのか、など具体的な内容が、読みやすい平易な文章で書かれています。もしかしたら、自分は今いじめを受けているのでは？という人や、逆にいじめを行ってしまっているかもしれない、という人にぜひ読んでもらいたい本です。

この本を読んで感じたこと。それは、集団いじめはその本質において、ヘイトスピーチやレイシズムと同じであるということ、集団いじめやレイシズムは、人間の心にある同じ闇の中から生まれてくるということです。

香山氏は、いじめや差別を行ってしまう人間の心理について次のように書いています。“いじめなんかすぐにやめるべき。誰もがそう思うでしょう。「どうしてやっているのかわからない」と思いながらいじめるなんて、ひどい話だということは誰にもすぐわかるはずです。でも、いったんいじめに加わってしまうと、それができなくなるのです。それは、ある相手を決めてその人をみんなで笑ったり、いやがらせをしたりしているうちは、「私はこの人たちと仲間なんだ」という結びつきを強く感じるからです。そして、「もし、いま私だけやめたら、今度は私があの子みたいにいじめられるかもしれない」という恐怖も感じるでしょう。それを打ち消すためにも、「あの子、またおかしなことを言ってたよ」「ホントにキモいよね」と集団いじめを続けなければならなくなるのです。”

いじめや差別は、その標的となった人を傷つけるだけではありません。行っている人自身にも深い傷を負わせます。いじめや差別は、人の最も醜い部分をあらわにする行為だからです。君が今、もしもいじめを行ってしまっているとしたら、そんな自分に誇りをもてるでしょうか？自分自身を好きになることができるでしょうか？

ルース・ベネディクトのことばを再度引用します。「私たちが傲慢無知であったり、あるいは恐怖にあおられて平常心を失うとき、分かりやすく耳に心地よい物語がそっと忍び入る。自暴自棄になったとき、私たちは誰かを攻撃することによって自分を慰める」いじめや差別を否定することは、他者を認め尊重することはもちろん、自分自身を肯定し、大切にすることにつながるのでと思います。

我が内なるレイシズム

この文章を書いている2022年12月、中東カタールの地ではサッカーW杯が行われました。日本代表のサムライたちが、ドイツ、スペインという強豪国を打ち破り、日本中が感動に包まれました。アルゼンチンとフランスの決勝戦では、W杯史上に語り継がれるに違いない名勝負が繰り広げられ、“神の子”メッシを擁するアルゼンチンが劇的な勝利

を収めました。

その熱狂の一方で、カタールW杯は人権問題が注目された大会でもありました。開催国カタールの、女性や同性愛者、移民労働者への人権侵害を問題視する声は、開幕前からヨーロッパの国々を中心にあがっていました。また、宗教指導者による独裁的政治が行われているイランの代表チームは、「ヒジャブ」と呼ばれるスカーフのつけ方が不適切だとして拘束された女性が死亡した事件に抗議して、国家斉唱を行いませんでした。スポーツの祭典の場に政治問題が介入することの是非はさておき、これらのできごとは人権に対する世界的な関心の高まりを示しています。

国民、民族としてのアイデンティティを持つことと、レイシズムは異なります。W杯では、自国のユニフォームに身を包んだサポーターたちが魂の声援をおくり、ピッチ上の選手を鼓舞する様子が報じられました。スペイン戦では、テレビの前で“三苦の1ミリ”のゴールに歓喜の雄叫びをあげた人もいます。

自分の国、民族、自分が属するグループに誇りや愛着を持ち、そこに自分は何者であるかという原点を求めるのは当然のことで、私たちはその上に自分の人生を築いていきます。その中で、人々が一体感を持ち、友情や信頼を育んでいくことも自然なことです。しかし、それが自分たち以外のグループを否定し、差別することにつながっていくとしたら、それはレイシズムです。

レイシズムは、社会の中でレイシズムであることが認識されて、はじめてレイシズムとなります。ナチス時代のドイツ国民にとって、ユダヤ人を弾圧することは当然の「社会正義」であったかもしれません。公民権運動の時代、黒人が白人と同じ権利を持つなど、「不道德」で、あってはならないことだ、と考えたアメリカ市民も数多くいたはずですが、日常に埋没し、見過ごされているレイシズムは、「こんなことが許されるのはおかしいんじゃないかな」「これって差別だよ」という声があって、はじめてレイシズムであると認識されるのです。

18世紀ドイツの哲学者、イマヌエル・カントは「我が上なる星空と我が内なる道德律」ということばを残しています。夜、私たちが頭上を仰ぐとき、そこには星々の燦然ときらめく空が広がっています。その存在は疑いようありません。同じように、私たちが自分の心の中に目を向けるとき、自らを律する理性や道德の輝きがたしかに存在するのだ、と理解できるでしょうか。

一方で、私たちの心の中にあるものは“道德律”だけではありません。自分たちと異質なものを排除し、否定しようとする気持ち、差別を生み出す性質が存在することも動かしがたい事実です。レイシズムは、時代や国の違いを超えて人類の歴史とともにあり続けました。人間は生まれながらに、レイシズムを宿命として背負っているのかもしれませんが。

しかし同時に、私たちにはレイシズムを拒み、差別を否定しようとする意志もそなわっています。マイノリティが不当な差別を受けるとき、社会的弱者がいわれのない暴力にさらされるとき、怒りの声をあげ、不正義に抗議してきたのも、また同じ人間です。

ユダヤ人強制収容所での体験をもとに書かれた『夜と霧』の中で、著者のヴィクトール

・フランクは「人間とはなにかをつねに決定する存在だ。人間とはガス室を発明した存在だ。しかし同時に、ガス室に入っても毅然として祈りのことばを口にする存在でもあるのだ」と書いています。人間にはレイシズムに対峙し、レイシズムを退ける力がある、と自分は信じます。

冒頭で書いたとおり、レイシズムについての文章を書くことは、一年越しの懸案でした。今回の『轟』で、まがりなりにも形にできて、少しほっとしている自分がいます。予想どおり（いや、予想を大幅にこえて）長い文章となってしまいました。最後まで投げ出さずに読んでくれた生徒諸君に感謝します。

注)

アウシュビッツ・・・第二次大戦中、ドイツが推進した絶滅政策（ホロコースト）により最大級の犠牲者を出したアウシュビッツ強制収容所。ポーランド南部に位置し、収容者の90%がユダヤ人であった。

頭指数・・・頭の前後の長さに対する頭の横幅の百分率。人類学などで、頭の形の比較・分類に用いられる。

※「校長室だより」は、本校のHPにも掲載しています。バックナンバーを読みたい人は、HPの「学校案内」→「校長室だより」からどうぞ。